

インド留学記

その3

プーナで 出会った人たち(1)

一 留学とは?

留学とは何か、ということをあらためて考えてみました。ふつうの辞典では、「留学」とは、「よその国に在留して学問をすること」と定義されています。

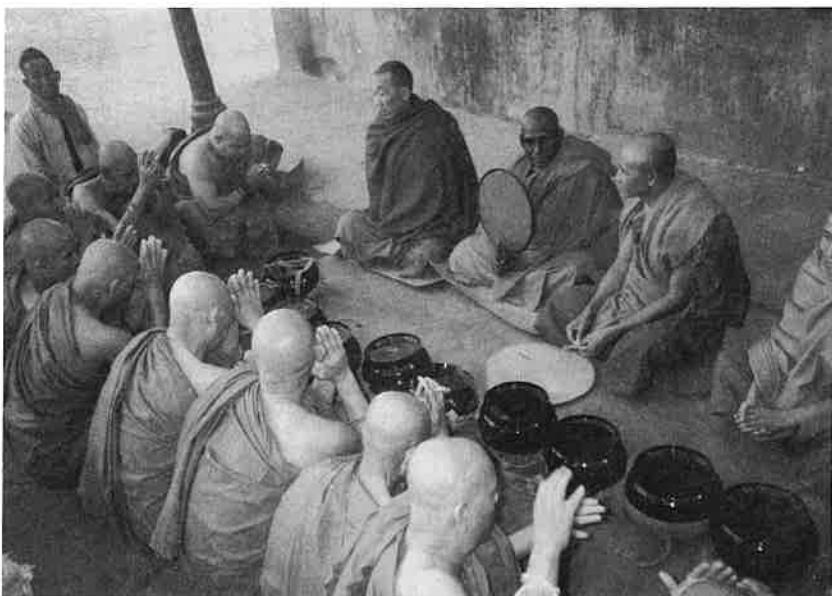
わが国では、明治以降、留学といえば、もっぱら欧米に赴き、新しい文物を学びとることでした。しかし、遣隨使や遣唐使のころは、中国へ勉強のために渡ることを、留学と称しました。

ただし、吳音で「るがく」と読まれました。多くの留学僧が海を渡りました。

弘法大師空海の詩文集『性靈集』によりますと、留学僧には二種があつたことが記録されています。半年から長くて一年中国にとどまる、いわば短期留学の「還學僧」と、平均数年(長い者は二十年も)かの地に学ぶ、長期留学の「留学僧」の二です。もちろん、弘法大師ご自身も留学僧のお一人でした。延暦二三年(八〇四)、三一才で入唐し、惠果阿闍梨から親しく密教を



東方学院講師
駒沢大学講師
慈園阿部



学び、三年滞在ののち帰朝しました。

当時の渡航は困難をきわめ、四艘^{そう}のうち一艘しか戻ることができなかつたといわれます。新羅などの朝鮮半島からも中国へ留学僧が渡りました。東方学院で一緒に『華厳經』を読んでいる、韓国からの留学僧の陳本覚さんに、

「お国の場合はどうでしたか？」

とたずねたところ、

「中国へは内海を渡ることになりますから、四つのうち三つは戻れたでしょう」

とこたえてくれました。

今日、中国やインドへは飛行機でひとつとびです。それも安全に。わたくしは、昭和四九年の初渡印から数えて、八往復しました。印度における全滞在期間は五年になろうかと思いますが、そのうち一番印象深いのは、やはり第一回目の渡印で、場所は留学地プーナといえましょう。プーナでさまざまな人に出会いました。

インド人はもとより、欧米や日本などからの留学生・研究者などです。

前回は、恩師ババット先生のことを書きました。今号は、わが国の一橋大学より来られたいた故深沢宏先生のことを述べたいと思います。といいますのは、先生の一言がわたくしをしてあることを決意せしめたからです。

二 深沢宏先生のこと

深沢先生は、昭和六年山形県に生まれました。一橋大学経済学部、同大学院を修了されたのち、同三一年インドのラクナウ大学に留学されました。三年のうち学位（Ph.D.）を受けられました。インド社会経済史に関する論文だったことを聞いています。それがのちに、『インド社会経済史研究』（同四七年、東洋経済新報社より刊行）の大著となりました。

先生のころは、留学生は主に船で渡印したと聞きます。横浜から、ホンコン・シンガポールを経由して、マドラスに至り、カルカッタからインド亜大陸に上陸し、汽車でラクナウへ。そして、カルカッタから帰国の船に乗ったとき、「三年間、自分はインドの夢を見ていたのではないか」と思われたほど、インド留学生生活は強烈であつたと筆者に語ってくれました。

同四一年より約一年間、イギリスのロンドン大学に留学されたのち、四九年イラン経由でインド・プーナのゴーカレー社会経済学研究所に止住されていました。同年十一月プーナ入りしたわたくしは、一ヶ月前に到着させていた北海道武藏女子短大の八力広喜先生（ともにバンダールカル研究所のゲスト・ハウスに住む）とつれだつて、深沢先生の宿舎をよくたずねました。先生の机の上には愛息の写真がいつも飾られておりました。それを見やると、

「わたしは、晩婚でしてね」とてれくさそうにつぶやかれました。

日本からのソーメンを手づからごちそうしてくれました。大きなパパイヤをかかえて、わたくしの部屋をたずねてもくれました。

ピーナへ来て一ヶ月ほどたつたころ、ひとりで先生の部屋をたずねたことがありました。印度の夕日を浴びながら、先生はいいました。

「阿部さん、これからどうするつもりです」
「Ph.Dコースに入れて頂きましたが、特に論文をまとめなくとも、二年ほどしたら日本に帰

るつもりです」
「そんなことではいけませんよ。せつかくPh.Dコースに入れて頂いたんだから、論文を提出して帰らなくては、インドの大学に對して失礼というものですよ」

先生のこの一言は、わたしの心を激しく動かしました。絶体論文をまとめて日本に帰るんだ、という決意をおこさせました。そう励ましてくださった先生は、惜むらくは一昨年(六一年)八月一六日病氣で他界されました。

(つづく)